

夢野市太郎

古代史幻想

日本人の原像を求めて思考の旅をした

テレビのスイッチを切り街に出よう



目次

はじめに	2
アフリカから旅に出て日本に着いた	4
縄文人？ 弥生人？	1 3
邪馬台国はどこだ	3 1
そして日本の国ができた	3 7
アイヌと琉球	4 7
まとめ	5 1

はじめに

平成二十三年三月十一日、宮城県牡鹿半島沖で起こった大地震による大災害のあと、世界各国から励ましの声や、日本人を賛美する声を送られた。私はそれらの各国からの声を見るたびに、嬉しい気持ちとともに不思議な気持ちが湧いてきた。災害が起こって暴動が起こらなかつたり、略奪が起こらないことが不思議なんだろうか。そうしたことが起こることの方が世界標準なんだろうか。

こうした認識は私にはかなりショックだった。私はけっしてお上品な生まれや育ちをしたわけではない。むしろ、自分ではかなりひどい環境で生まれ育ったと思っていた。小便の臭いや、町工場から垂れ流される極彩色の排気ガスや排水の悪臭で満ちあふれた町。小学校の校内でカツアゲがあり、授業中に教室の中でどつき合いが始まるような町。そんな町を出て社会人になっても、苦情処理でやくぎの組事務所に入出入りする人たちに取り囲まれ身の危険を感じたこともあった

。そうした体験から日本人に対して「行儀がいい」とか「礼儀正しい」という印象はあまり持っていなかった。しかし、東日本大震災以降の世界中からの日本人賛美の声に、もう一度日本人について考えてみようと思うようになった。

また、大震災後、石原慎太郎ら日本人の中から「天罰だ」という声が聞かれた。その声を聞いたときには生理的に嫌な気がした。どういう意味でそうした発言があったのか知らないが、「天罰」という言葉だけからは「まるで旧約聖書の世界じゃないか」と思えた。日本の神様はそんな倫理や道徳で人を不幸にはしないだろうと思う。自然災害の非常に多い日本ではそういう感覚は、もともとはなかったように思える。こうしたことがきっかけで日本人のことを考えてみようと思った。そこで日本人の心を知るには日本人の起源を知る必要があると思えた。図書館で本を借りたりして集中的に本を読んでいる内に、頭の中の世界を形に表してみようと思うようになった。幸いにも電子書籍ならばお金がかからない。

なお、この本で展開する古代の世界は私がいろいろな本を読んでイメージしたもので、こつこつと研究した成果ではない。だから「幻想」なのだ。しかし、それほどはずれていないという自負はある。

アフリカから旅に出て日本に着いた

私が子どもの頃は形質による人類の分類が主流だった。肌の色で黒人、白人、黄色人種といった分け方をしていた。進化の順序は黒人→黄色人→白人といった認識がなんとなくあった。鼻の高さが進化の程度だという学者がいた。唇の厚いのは下等だという学者もいた。しかし、ある学者が脳の容積を調べたらその大きさは大きい順に並べると黄色人→黒人→白人となった。さらに日本の学者は猿と人間の唇の厚さを比べると猿の方がはるかに薄いと主張した。今ではそうした肌の色などで人類を分類する人はほとんどいなくなった。しかし、他の骨格や歯の形などの形質

で人類の分類をすることは依然として行われている。特に縄文人と弥生人の分類によく用いられている。そうした形質による分類は、生物は環境によって短期間に大きく形態を変化させるということをしつかりと認識して行わないと大きな誤りをおかすことがだんだん解ってきた。そこで血液型や白血球による分類がでてきたが、これらの常染色体マーカーによるものは、集団間におけるマーカーの比率を比較するだけで、各集団間の系統関係を調べることができなかつたことと、父や母由来の染色体間に組み替えが起こるので、父系遺伝や母系遺伝の系譜を遡って調べることができないという欠点があった。そこで比較的分子量が小さいミトコンドリアDNAの研究がでてきた。ミトコンドリアDNAはなぜか母親からしか子どもに伝わらないため、母系の系譜しかたどれないために、最近ではY染色体の研究から父系の系譜をたどることができるようになった。もちろん過去を遡るということはそう簡単なことではなく、この方法が絶対という方法もない。DNAによる方法でも、初期の研究結果と現在とはかなり異なっている。つまり単一の方法では正確なことがわからないのだ。ここが重要だ。学者にはは自分の研究成果をやたらと大きく見せたがる人たちがいて（研究費を獲得したいという経済的な理由もあるのだろうが）、針の穴から覗いた世界を全世界だとマスコミに発言することがよくある。そうすると科学がオカルトになってしまう。旧石器捏造事件などいい例だ。数十万年前の地層から縄文時代と同じタイプの石器が出てきたと大騒ぎして、学術的に保証され、教科書にも載るようになったが、その発掘状況を調べると、素人のような大間違いを、文化庁主任文化財調査官が中心となり、それを国立歴史民俗博物館の考古学の権威とされる学者が後押しをやっていった。

大昔の地層から発掘されたはずなのにほとんど土砂のこびりついていないつるんとしたきれいな石器を、簡単に大発見に認定してしまった。数十万年前の人類と現代人とはまったく異なる生物であるということも忘れてしまっていた。異なった生物が同じ石器を作るのかどうかさえ考えなかった。出るはずのない火砕流から発掘された石器まで本物と認定した。石器についてあまり知識のない視力の弱い男が神の手を持つ男に祭り上げられた。大発見という名誉に酔ってしまったのだろうか。おまけに自分たちを批判する論文は学会誌に載せないように圧力をかけて葬り去

った。彼らを正面から批判した人には職場を左遷された人もいた。そうした捏造をマスコミがこぞってよいしょした。お祭り騒ぎにした。一部の学者や役人がマスコミを利用して、学会や学術論文に載せる前にどんどんマスコミに発掘成果を発表した。この非学術的手法にマスコミがのった。学者も役所もマスコミも経済人も一般人もみんな揃ってばかみたい騒いでいた。二十年以上も。「ほとんど犯罪じゃねえか」と素人の私は思ってしまう。もし、毎日新聞の記者が証拠をつかんで追求しなければ、現在の考古学会は完全に世界から馬鹿にされて孤立していただろう。

古代のことを考える時は、単一の方法ではだめなのだ。いろいろな方法を多角的に用いて考えなければ大嘘になる可能性が出てしまう。ペテン師を英雄に祭り上げてしまう。

DNAによる分析に加えて、成人T細胞白血病ウイルスやピロリ菌のような母子感染が主な感染ルートであり、ヒトとともに進化する微生物からも、ヒト集団の移動ルートを推定できる。そこに考古学による裏付けも大切だ。考古学とまったく違う結果が出た場合は他の方法とも比べてみてその正誤を考えるべきだ。さらに形質人類学によるデーターとの比較も行ったほうがよい。だれもが納得できる内容に高めていくから科学なのだ。それをやらなければオカルトと変わらなくなってしまう。ここではDNA分析や言語学分析を主に崎谷満の「新日本人の起源」に頼っているがこれが唯一だとは思っていない。他の著作と比べ最も私の思い描く日本人像に近いということだ。それでは「新日本人の起源」をもとに話を進めよう。

現世人類はおよそ二十万年前にアフリカで生まれた。そして約六万五千年前にアフリカを旅立ち世界に拡がった。東アフリカと地続きであったアラビア半島を経てユーラシア南部に至ったという説が有力だ。この時、たった一つの集団（ミトコンドリアやY染色体のハプログループ）が移動したということではなく、いくつかの集団が混在して移動したと思われる。しかしそれは単

一の種なのだ。もちろんアフリカに留まった集団も同じ種なのだ。なぜこんなことを繰り返し書くかといえば、現在も形質の特徴から多地域進化説を唱える人たちがいるからだ。人種の形質による差異はその地域に先行して住んでいた原人によるものだというのだが、DNA分析では単一の種しか認められない。つまり、世界各地のヒトの形質は遺伝子型とは相関しないのだ。それは現存するヒトは「人種」によって遺伝子が異なるものではないということだ。生物の種として異なっていないのだ。遺伝子型が数百のハプログループがあるからといって、それは生物種として別なものではないということだ。「人種」とはあくまで形質的に見た差異でしかない。形質的な差異は環境によっておおきく異なるのだ。ついでに言えば、遺伝子とはただタンパク質を作るプログラムにすぎない。遺伝子が生物の形質の全て（細胞の分化も含めて）をプログラムしているわけではないのだ。生物の形質全てをプログラムするにはあまりにも情報量が多すぎて遺伝子だけでは情報量がたりない。例え同じ遺伝子を持ったクローンであっても、異なった環境で育てれば異なった形質を表現する。形質を特定する遺伝子のスイッチはどんな環境でも同じようにONになるわけではない。それが生物なのだ。日本でも欧米でも世界各地で双子の研究が進められているが、人間の場合、人道的観点から、同じDNAを持つ双子をまったく異なった環境で育てるということは難しく、ほとんどの場合、双子が似たような環境で育てられている。そうした研究からはそれほど大きな成果はできない。逆に人間でなければ、環境が個体に及ぼす影響をうまく調べられない。ただ最近の研究ではヒトゲノムの構成のなかで人間に感染したウイルスの名残とされるHERV（ヒト内在性ウイルス）が9%もあり、人間の形質発現に大きな影響があるということ（フランク・ライアン「破壊する創造者」）がわかってきたなど、今までの単純な遺伝子が全てを決定するということは言われなくなってきた。

アフリカを出たあと、ヒトは大きく分けて三つのルートに別れて移動した。そのうち中央アジアからシベリア、華北へと移動した集団はさらに東南アジア、東アジア、そしてアメリカ大陸まで移動した。三つのグループのなかで最も行動範囲が広い。そして多くのハプログループが分

かれた。日本へやってきたヒト集団はこのグループの人たちだ。

一方、インドから東南アジアからオセアニア、オーストラリアへと移動したグループはそれぞれの地域によって特異的な分布をしている。例えばニューギニアの山岳部にはかなり古いヒト集団が他の地域とは切り離されたように存在している。

三つ目のグループは西アジアから中東に移動し、そこからレバノンを通り北アフリカへ移動したグループと、バルカン半島からヨーロッパ、西シベリアへと移動したグループと分かれた。もちろん、移動したといっても、集団がまるごと移動したのではなく、移動した地域に住む人たちもいるから、拡大といったほうが良いのかもしれない。

今までは南ルート of ヒト集団が東南アジアや台湾、そして沖縄へと北上し、日本列島へも入ってきたとされてきたが、DNA分析やピロリ菌の研究からはどうも違うらしい。北ルートからのヒト集団しか日本に入ってきていないようだ。例えば日本やベトナム、台湾先住民にはミトコンドリア、Y染色体の両方のDNAでも南ルートのものは全く入っていない。北ルートのヒト集団は一度アジア北部へ移動したあと東アジアや東南アジアなどアジア全域に広がったようで、南ルートのヒト集団はかなり地域が限定されている。

考古学的な史料からみると、三万六千年前に石刃技法を持ったヒト集団が九州にやって来た。その後二万年前頃にバイカル湖周辺で楔形細石刃核を持つ技法が生まれた。その技法は極東・アムール川流域へと伝わった後、すぐにサハリンから北海道、そして東日本から西日本まで伝わった。一方、同じ技法は極東・アムール川から中国東北部・朝鮮半島を経て西九州にも伝わったが西九州を中心とした地域だけだった。それに代わって華北を起源とする角錐状細石刃技法が一万七千年前に九州に伝わり西日本にも伝わった。伝わったと言うことは、そうした技法を持つヒト集団が移動したということになる。そうした移動はミトコンドリアDNAからだけでなく、成人T細胞白血病ウイルスからも裏付けされている。アイヌ・琉球同祖論では本州の縄文人が弥生

人に南北に圧迫されて北のアイヌ人と南の琉球人になったということだが、琉球では細石刃文化は確認されていないし、アイヌ人に存在するY染色体ハプログループは琉球人には存在していない。また言語学的な要素からもアイヌ語と琉球語ははっきりと異なる言語なのだ。なお、アイヌ民族については、後で詳しく説明する。

日本列島へのヒトの移動について三つのルートを紹介したが、新石器時代の遺跡から発掘される人骨のDNA分析では日本列島の住んでいたヒトたちは、なんとも多様性に富んでいることがわかる。あとから述べるが、単純に縄文人や弥生人といった区分けができないほど多様性にとんでいる。北海道、東日本などという大きな区切りでは到底おさまりきれないのだ。関東だけでも地域差がある。また、各地域で発掘された遺跡人骨とその地域に住む現代人DNAが大きく違う。つまり、日本列島へはいろいろなヒト集団が絶えず入ってきていたということだろう。そして、ここが大事なのだが、それぞれのヒト集団は抗争・対立をほとんどせずに、暮らしていた。これは遺跡の発掘から見た当時の戦争状況を調べるとそうなるのだ。もちろん人口が少なく土地や獲物をめぐって争いをする必要が少なかったともいえるが、とにかく、異なったDNAを持った集団が、列島の中をまるで棲み分けしているかのように平和に生活していた。これは、華北で生まれた漢民族が急速に中国大陸に広がり、もともと住んでいた人たちが周囲に拡散した事と比べるととても大事なことなのだ。ちなみに漢民族に特徴的なY染色体O3グループは日本人には二割以下しか入っていない。そしてY染色体グループD2 やC1 という世界で日本人にしかないハプログループがある。

縄文人？弥生人？

細石刃技法について考えてみよう。この技法によるメリットは持ち運びに便利であるということ、つまり移動がたやすくなるということ。小さな動物の狩猟に便利だということだ。この技法が生まれた頃、地球は温暖化の方向に向かい、マンモスやオオツノシカなどの大型の動物が減り小型の動物が増えた。そうした獲物の変化にともない狩猟道具も生活様式も変化したものと思われる。また、石の鏃がアジアでもヨーロッパでも作られるようになったのも、獲物の小型化による狩猟形態の変化によるものと思われる。

しかし、さらに環境が変化してくると、日本列島では、獣だけでなく魚介類や木の実、雑穀なども積極的に食用とされるようになる。それとともに土器が作られるようになった。いわゆる縄文時代が始まるのだが、縄文を施された土器は日本列島だけでつくられたのではない、むしろ時期的には極東・アムール川流域のほうが少し早いようだ。また、縄文の施された土器は長江流域を含むユーラシア東部のほとんどの地域で見られることから、縄文を施された土器の技術は極東・アムール川地域から北海道に渡り、東日本へと伝わったようだ。しかし、西日本に伝わったのはかなり遅く、九州にはほとんど伝わらなかった。また、北海道で一万二千年前の縄文土器が発掘されたが、同じ頃の年代とされる愛媛県上黒岩岩陰遺跡の土器は隆起線紋土器や無紋土器、長崎県福井洞穴で発掘された土器は豆粒紋土器や隆起線紋土器などで、とても縄文土器とは呼べない。つまり、この頃から北海道・東日本と西日本・九州とは異なったヒト集団が住み、異なった文化を持っていたということだ（崎谷満「新日本人の起源」）

さて、この頃の大きな変化をあげると一、定住生活の開始。二、農耕（雑穀農耕）の開始。三、土器の制作。四、鏃と弓矢の発明。五、漁撈技術（石錘を利用した漁網や釣り針などや貝類の採集）の進歩。六、航海技術の進歩。がある（崎谷満「新日本人の起源」。またこの頃から雑穀

以外の植物の簡単な栽培もおこなわれるようになった。土器の制作は神への儀礼祭祀に使われただろうが、雑穀や木の実、さらに魚介類を食べるために発明したのかもしれない。またそれによって、飛躍的に食料事情が改善され人口増加に繋がったと思われる。特に魚介類のウエートが大きかったようだ。それが後々まで、日本で牧畜が発達しなかった原因かもしれない。日本で食用のために家畜を飼うということは明治までなかった。猪については飼っていたことがあったかもしれない。ただし、日本書紀などの文献に出てくる猪は豚であろう。中国語（漢語）では豚を猪と書く。猪飼野という現在ある意味でとても有名な地名も渡来人が豚を飼っていた地方がそのように名付けられたのだろう。明治の頃まで食用の家畜（家禽は除く）を飼わなかったことが結果として、世界で第三位の国土に占める森林の占有率の国であり続けていることができたのだろうと思われる。羊や牛といった大型家畜の牧畜の盛んな国はみんな森林の占有率が少ないのだ。日本より多い国は北欧の二国だけだ。F A O（国連食糧農業機関）の二千十年のデータによると、一位のフィンランドが約73%、二位のスウェーデンが約69%だが、日本との差はわずか0.2%四位の韓国が63% 五位のロシアが約50%で世界の平均はわずか30%しかない。山の国と思われているスイスでも31%しかない。イギリスにいたっては（二千四年データ）11%ほど。ちなみにお隣の国中国では二千九年のデータで約14%となっている。北朝鮮では二千五年データで約51%。しかし、もともとの森林はもっとあったに違いない。北は南の韓国よりも山間部が多く土地が痩せていてあまり農業に適した土地がない。赤い王朝になってから間違った農法である稲の密集栽培（共産主義農法といってソ連の学者が提唱しスターリンが広め毛沢東が中国全土で実践して人類史上最大の餓死者の山を築いた）や山間地に本来家畜用飼料であるデントコーンを人間の食料用として栽培したことによって、急速に森林が破壊されたからだ。その結果が大洪水や食料不足でわずか二年間ほどで国民の一割以上が餓死した。なぜ家畜用コーンかといえばスイートコーンはいたみやすく、移送手段が発達していない北朝鮮では収穫した物を各地に移送できないからだ。これは毛沢東時代の中国でも同じ事だった。森林の大切さはアジアの赤い王朝では理解できないのかもしれない。

この縄文時代といわれる時代には人口は東日本に集中していた。日本列島の植生をみると、次のようになる。（崎谷満「新日本人の起源」）

北海道中央・北・東	冷温帯針広混交樹林	トドマツ、ハンノキ、カンバ
北海道南・東日本	冷温帯落葉広葉樹林	ブナ・ナラ・クリ・トチノキ
西日本・九州・琉球北部	温帯照葉樹林	カシ・クスノキ・ツバキ

東日本に人口が多かったのだが、地域ごとに個性的な道具が生産され使用されていた。また火炎土器のような非実用的な過剰な装飾を施された土器が作られた地域もあった。これらは各地域ごとに独自の文化や技術があったということだ。そしてそれらの地域は孤立しておらず、交流も頻繁にあったようだ。認知考古学の松木武彦は縄文土器の装飾がどんどん複雑派手になった要因として、こうした地域共同体間の頻繁な交流をあげている。一方、人口の少なかった西日本や九州では、大きな集落がなかったが、朝鮮半島や南島との交流が密接にあった。それは土器の製法やデザイン、釣り針の製法などからうかがえる。

ここからはさらに松木武彦「進化考古学の大冒険」の力を借りて縄文時代の人々の生活を見てみよう。

七千年ほど前に環状集落が現れる。そしてその中心に墓地が作られた。これは定住化した人口密度が高まり他地域との関係で緊張感が高まったことにより、共同体意識が高まったものによる。他の共同体との差別化だ。やがて五千年前には中央の広場に石組みの環を持った環状集落が現れる。石組みの環が集落から独立し、そこから離れた特別の場として環状列石が設営されるようになった。つまり、住居と中央広場というように日常空間と非日常空間とが区別されるようになった。これは死者と生者との区別にもなる。この時に自然を自分たちヒトとは別なものとしてとらえるようになったのだろう。それは宗教の誕生でもあった。

四千五百年前になると抜歯などの歯の加工や耳輪などが登場するようになる。また、仮面の制

作も始まった。これらは自然への畏敬の念が芽生えたということではないのだろうか。肉体を加工するということは自然の力（特に海や川）に対抗するための呪力を身につけるためのものだ。この時、神が生まれたように思う。自然が人間のように意志を持った存在＝神として意識されるようになったのだ。

四千五百年前、九州の低地の村ではすでに稲が栽培されていた。どういうルートで入ったものかまだわからないが土器の共通性から朝鮮半島から入ったものと思われる。四千年前から九州で黒色磨研土器が出てくる。形・デザイン・質感の三つの要素がスタイルとして統一化された什器のセットが現れるが、これは朝鮮半島から入ってきたものだろう。。朝鮮半島からは一貫してヒト集団の流入があったのだ。

ここで少し他の国に目をやると、山東半島では四千年前、水田や包丁、石斧が発掘されている。ヴェトナムでも四千年前には水田稲作がされており青銅器も使っていた。おもしろいことに、ヴェトナムでは青銅器は不必要に大型化される傾向にあった。まるで日本の銅鐸や銅鏡のように青銅器を大型化する文化があった。朝鮮半島では三千年前に水田稲作が始まった。

日本では三千年前ごろに北九州で水田稲作が始まったようだ。それは無紋土器が半島から伝わった時とほぼ同じ時であることから、日本の水田稲作は朝鮮半島から入ってきたと思われる。弥生時代の幕開けということだ。この頃は気候が寒冷化していた。つまり環境の変化による食生活の変化があったということだ。だがこの寒冷な気候は二千六百年前頃から温暖化していく。水田稲作も温暖化に伴って東日本へ北上していったのだろう。ただ、青森まで達するのに八百年ほどかかっている。東日本ではあわてて水田稲作をする必要がないほど自然の幸に恵まれていたという要素もあっただろう。

さあ、これから「縄文時代？弥生時代？」というテーマについて語りたい。DNAからみると（遺跡から発掘された人骨からもDNA鑑定ができる）多様なDNAを持ったヒト集団が日本列島各地に住んでいたことがわかる。彼らはそれぞれ独自の文化を持っていた。土器の多様性が

らもそれがうかがえる。それにもかかわらず、日本列島に住んでいるヒト集団全員を縄文人と名付けていいのだろうか。それは弥生人についても同じ事が言える。弥生人なんて人種はなかった。DNA的にも文化的にも。確かに水田稲作が入ってからヒトの体型は飛躍的に変わった。しかし、それは食性との関係はどうなのか誰か調べたのだろうか。現代人でも、環境の違いで体型が大きく変わっている。例えば、豊に座って米と魚を主食にしていた日本人カップルが欧米で家庭を持ち、そこで生まれた子どもは肉食を主食として床の上で生活していたら足の長さや体型など大きく異なっている。頭骨に関してはまだ、私にはうまく説明できないがたった一代で体型は変わるのだ。弥生時代になって日本列島に住むヒト集団のDNAがまったく異なったわけでもない。体型がかわったからといって縄文時代に生きていたヒト集団がほとんど新しい朝鮮半島からきたヒト集団にとって替わられたと考えるのはあまりにも短絡的ではないのだろうか。縄文人＝敗北者、弥生人＝勝利者・征服者とい図式は現在でも、日本の一般人だけでなく、多くの知識人の認識でもあるようだが、そろそろそういう考えは改めるたほうがいいだろう。また朝鮮半島からきたヒト集団だからといって朝鮮民族ときめつけるのもおかしなことなのだ。長江流域で水田稲作文化を発展させてきたヒト集団が華北からやってきたヒト集団の圧迫を受け散り散りに四散するなかで、山東半島に移り住んだヒト集団がいた。その集団は朝鮮半島に水田稲作を伝えて、朝鮮半島南部に水田稲作が広まった。そこで朝鮮民族がところてん式に押し出されて日本列島にやってきたと考えるよりも、山東半島から朝鮮半島に移り住んだヒト集団が、そこである程度広がりを持った後、日本列島へ移ってきたと考える方が、DNA分析からも辻褄があうし、文化の面からも、例えば鯨面、体への文身や青銅器をどんどん大きくする傾向などからうまく説明できるだろう。長江流域に住んでいたヒト集団（中国名では越人）にはそうしたイレズミの風習があった。また、ふんどしを締め米を食べていた。漢族の墳墓から発掘される銅鏡は日本のものより小型で数も一枚のことが多い。多くても二枚なのだ。日本のように数十枚も一度に埋められるようなことはなかった。ちなみに南越王の墓では十数枚出ている。こうした長江流域に住んで

いたヒト集団については森浩一が多くの著作で紹介しているので参考にして欲しい。もう少し突っ込むと、朝鮮半島南部のヒト集団と日本列島北九州のヒトたちはもともと同じ長江流域から山東半島に移ったヒト集団（単一の集団とは思えないが）であった可能性が大きい。さらに北九州に入ったヒト集団は山陰・山陽・近畿へと拡がっていた。それでは新しく入ってきたヒト集団は、先住のヒト集団と激しい抗争があったのだろうかということそうではないのだ。遺跡の調査から当時の戦争の状態が解るのだが、水田稲作を持ってきたヒト集団と、先住のヒト集団とではほとんど争ったあとがない。むしろ列島に定着した新しいヒト集団同士で激しい争いがあったのだ。水田稲作技術を持ったヒト集団は新しい武器と新しい戦術も持っていた。それなのに、彼らはヨーロッパ人がアメリカ大陸やアジア・アフリカの地で行ったような圧倒的な武力で領土を略奪するといったようなことは行わなかった。むしろ、先住民がそうした先進的な戦術を取り入れ、先住民同士で戦争をおこなっていたのだ。つまり、先住民対侵略者という図式はあまりあてはまらないのが、日本列島の弥生時代初期なのだ。これは弥生時代の特徴を備えた有力者の墓から、体に鏃の刺さった、典型的な縄文人の体型をした人が発掘されたことから縄文人対弥生人という図式は成り立たない。縄文人も弥生人も一緒に、共通の敵と戦っていたということだ。同じ共同体の成員として他の共同体と戦っていたということだ。現代の知識人の多くが縄文人＝狩猟民族、弥生人＝農耕民族というとらえ方をしてる。しかし、縄文人（この言葉もおかしいのだが、ほかに適当な言葉が見つからないのでこのように表現しておく）は定住していて、アワやヒエなどの雑穀を栽培していたのだ。山内丸山遺跡のような非常に大きな共同体を作っている集団も存在した。農耕はすでに縄文時代からおこなわれていた。つまり新石器時代には狩猟採取の生活から雑穀農耕が始まり、水田稲作が持ち込まれてからは九州・西日本を中心として水田稲作が拡がった。その後小さな国ができ、やがて西日本の有力者による連合国家としての大和朝廷が生まれた。そうした流れの中で日本人の体型も大きく変化したということだ。日本列島全体からみれば、縄文時代も弥生時代もなかったのだ。他民族による侵略がないということはそのようなことなのだ。一つの明確なまとまりを持った民族を形成することがないまま、さまざまなヒト集団

がともに日本列島に暮らしていた。小さな争いはあっても大きな戦争をしないまま。

この戦争については認知考古学の松木武彦が詳しく研究しているので「日本列島の戦争と初期国家形成」から借用しよう。ただし、松木は現代にマルクス主義を甦らせて考古学に応用するというをいろいろな本で書いている。彼のマルクス主義とは史的唯物論ということらしい。しかし、彼の研究成果はマルクス・エンゲルスの国家観とは正反するものであり、それにもかかわらずなぜマルクス主義にこだわるのか私には理解できない。また、邪馬台国の場所めぐり講演会では、九州説の奥野正男に気圧されたのか、やたらと上部構造を強調していて、彼の書に書いてあるような「下部構造の分析から」はほとんど語らなかつた。遺跡の発掘資料では九州説に勝てないと思っていたのかもしれない。今回、私も昔読んだ「家族・私有財産・国家の起源」を読み直してみたが、日本の国家形成を説明できるものとは思えなかつた。松木武彦はマルクス主義者(?)で邪馬台国畿内説ではあるが、その研究内容は大いに学ぶべきものがある。特に「日本列島の戦争と初期国家形成」では従来の著作では畿内説を前提に論を進めていたのを若干修正して、邪馬台国の場所を畿内に特定していないように思える。

紀元前一～二世紀。北部九州では戦争による死傷者の数が増加しなくなり安定した状況になった。これは共同体間の緊張が戦争以外の方法で解決されるようになったと思われる。それとともに共同体間の序列化も行われるようになったのかもしれない。そうした状況のなかで人々は各共同体をかなり自由に移動したようだ。そして、一つの共同体のなかの構成員は単一のあるいは特定の血縁集団だけでなく、他の共同体から移動してきた人たちも混在していた。人々は土器や作物を持って共同体間に出入りしそこで住みつく人もいたのだ。共同体間の出入りはそれ以前からあったようで、けっして閉鎖的な共同体をつくっていたわけではないようだ。また、大きな視点からみれば、瀬戸内や近畿では北九州系の文化を持った共同体と縄文的な文化を残した共同体が混在していた。そうした異種の文化を持つ共同体間でも自由な人の出入りがあった。この頃（

紀元前一～三世紀)のことを日本列島全体で見ると次のようになる。

北海道： 墓への器物副葬がピークになる

北九州： 大酋長とテクノポリスが現れてくる

近畿・東海：環濠集落が最も大型化

関東： 環濠集落が現れ稲作が本格化

東北： 日本最北端の津軽に水田ができる

(松木「日本列島の戦争と初期国家形成」)

気候で見ると、紀元前七～八世紀に寒冷化が終わり温暖化へと向かい、紀元前一～三世紀頃最も温暖になった。稲作にはよい気候になったのだ。

紀元一～二世紀。瀬戸内から近畿にかけて高地性集落が濃密に出現するようになる。また、山陰地方や瀬戸内の高地に墓地が多く作られるようになる。これは高地になにがしらかの関心を持つようになったのかもしれないが、戦争の激化によるものという単純な解釈は間違っているだろう。もっと宗教的な意味を考えたい。

ここで邪馬台国の考察に行く前に墓について考察してみよう。この部分も資料は松木武彦「古墳とはなにか」に頼っている。解釈は私の考えだが。

縄文時代の墓はただ地面に穴を掘って遺体を埋める土壙墓が最も多い。ところが水田稲作が伝わると木棺が普及し、墓の様式も多彩になる。例えば木をくり抜いたものや、板石囲いの箱式石棺や、木棺を囲う石組の石槨など。九州北部では石槨や箱式石棺の上に大きな石を配置しそれらを支柱としてその上に巨石を載せる支石墓や埋葬した上に土を盛った封土墓が現れる。いっぽう近畿では土盛りをしてからそのなかに埋葬する墳丘墓が現れる。これらはその地方独自に出現したものではなく水田稲作とともに朝鮮半島から伝わったものだ。それが九州から近畿へと一つの流れになっていないところがおもしろい。

紀元前四～五世紀になると九州北部では大きな甕に遺体を納める甕棺が一般的になり、近畿で

は六つの部材からなる箱形の木棺、中部や関東では白骨化したものを壺に入れて埋葬する再葬墓が多く見られるようになる。つまり埋葬方法にはっきりとした地域色が出てきた。こうしたことはその地域のヒト集団の死生観や世界観がそれぞれ独自なものを生み出したとともに、共同体意識がそうした死生観や世界観でまとまるようになったということだ。単に生活を共にするというだけでなく、共通した世界観・宗教をもつようになった。それとともに国家の原初的なものが出てきたと思う。

紀元前二～三世紀頃作られたとみられる佐賀県吉野ヶ里遺跡の墳丘墓では十四個の甕棺があり、男性の墓から青銅の剣が発見された。十四個の甕棺のうち半分以上から青銅の剣が発見されたことからこの墳丘墓は戦闘の指導者的な立場にある人達の集合墓とみられる。つまり、家族や親族から離れたところに共同体の指導者的立場の人の墓が作られたということだ。こうしたことは水田稲作が入ってきてから顕著になった。この頃、環濠集落が多く見られることから、水田稲作集落間の争いがあったようだ。そして、その武人たちの集合墓は環濠集落の外につくられている。これは、たんに死者を共同体全体で悼むということだけでなく、葬られた死者たちと共同体員との関係に上下関係などの新しい関係ができてきたということではないのか。さらに、共同体員へのメッセージとともに他の共同体へのメッセージでもあっただろう。墓は共同体の象徴でもあった。だから、共同体構成員だけでなく、他の共同体に対して、自分たち共同体との違いをみせるために独自の装飾がほどこされたのだ。その装飾が時代が下るとともにどんどん手の込んだものになっていくことからそう窺える。人間にはそういう傾向がある。石器や土器が実用性を無視したかのように装飾が複雑になり手の込んだものが生まれるように。これは後に古墳へと繋がっていく。

この頃の共同体内での人間の上下関係はマルクスやエンゲルスの言うような富の集積や灌漑工事の指導者ということからでなく、武力が始まりであったように思える。戦いは一般の共同体員

もともに戦った。そのなかで体力や知略に長けたものや、あるいは武器を朝鮮半島などから仕入れる繋がりを持っている人なども他の人の上に立つ要素があっただろう。そういう物流の要所に大きな共同体ができていく。そこに宗教的力とが絡み合っていく。たぶんこの頃には戦いを始める前には神への祈りがあっただろう。狩猟に行く前に神への祈りがあるように。共同体間の争いは、自然が神であった段階から人間的な段階である戦闘に神を生んだ。そしてその力である青銅の剣が水という神を鎮める神となった。出雲ではヤトという川渕や岩の窪みなど三方が閉じて一方が開く谷地形や谷筋を神の交通路として青銅器を埋める祭祀があった。それが素戔嗚尊による八岐大蛇退治神話につながったのだろう。

紀元前一世紀頃、北九州では一際めだつた副葬品が埋葬された墓が二つあった。多くの武器だけでなく前漢時代の鏡やガラス玉、ガラス製の璧が副葬されていた。これは前漢とも交流があったということだろう。つまり、他の共同体に対して優位に立つために、あるいは優位に立っていたために当時の文明最先進国である前漢と繋がりを持ったということだろう。二つの墓は同じ盛り土で覆われていたことから密接な関係であったのだろう。紀元前四世紀頃には傷ついた人骨が多く見つかるのだが、紀元前一～二世紀になると、戦死したと思われる人骨は増加せず一定の量で推移する。このようなことから北九州では共同対間の序列がついていたと思われる。鶏の「つつき」のような関係が共同体間にあったと思われる。

これに対して、瀬戸内や近畿・東海西部では三千年前の寒冷期に東日本から多くの人々が移動して人口が増えた。水田稲作とともに新しい文化が入ってきたのだが、縄文時代からの文化が多く残っていた。遺跡物からみると。水田、環濠集落、石包丁、石斧という新文化の物質がセットで出てくるのは紀元前六～五世紀頃でしかも、古くからの生活をする共同体と併存していた。水田稲作と雑穀農耕とが共存していた。共同体間に大きな戦いがなかった。共同体間の序列化はなかった。さらに打製石器が復活して流行したり、分銅型土製品といわれる人の姿をした像が流行した。これは縄文時代の文化が形を変えて再現したということだ。輸入された文化とはことな

る伝統的な文化が再流行した。

伊勢湾より東の地域では紀元前一～二世紀に環濠集落があらわれる。しかし共同体の大きさにあまり差がない。同じような大きさなのだ。青銅器の武器もあまり発掘されていない。水田稲作はとりいれても、それに伴う文化はほとんど取り入れられなかったようだ。

青森では水田稲作は伝わったのにそれを刈り入れる道具である石包丁や石斧が発掘されていない。まるで水稻にしか興味がないといった様子なのだ。

こうしたように弥生時代といわれる時代においても、日本列島の各地では様々な文化や生活があった。しかし、それは紀元四世紀頃になって急速に変化していく。西日本に連合国家が生まれると、国家はそれが自己目的であるかのように、急速に東日本へと勢力を拡大し、文化的なまとまりができていく。

邪馬台国については明治に東大の学者が九州説を唱えてから、こんどは京大の学者が畿内説を唱え、それ以後九州説と畿内説が有力説として争っている。ただそうした論争が東大＝九州説、京大＝畿内説といった学閥の対抗戦のようになっているのはなんとも嘆かわしい。邪馬台国についてあまりにも多くの本が出ているのでここでは簡単に私の考えを書こう。

九州説と畿内説の論争は箸墓古墳の年代測定を国立歴史民俗博物館がおこなった炭素年代測定法がきっかけとなって一気に畿内説が考古学界の多数派になったようだが、ここでもマスコミ（朝日新聞の一人の記者が主導）が畿内説学者からの一方的な情報の垂れ流しをすることによって、そうした世間の気運が強くなり、学会内でも多数派を占めるようになっていったのだ。こうした状況は、旧石器捏造事件の時と同じような状況でもあるし、さらに遡れば、戦時中の翼賛報道とも繋がる。マスコミはインターネットが普及し始めた頃、情報の垂れ流しはよくないといって自分たちの正当性を強調していたのだが、彼ら自身が垂れ流し報道をしている。話題の欲しい研究費の欲しい学者にとっては美味しいことかもしれないが、学問の世界のことぐらひは、冷静で客観的な報道が必要だろう。朝日新聞グループには読売新聞への対抗意識からか、過剰に政治や学問の世界を演出する傾向がある

邪馬台国の場所を巡っての論争のものは「魏志倭人伝」（魏志東夷伝倭人条）の解釈から始まった。距離が里だけでなく水行で何日といったように旅行にかかった日にちでも書いているからややこしい。だがこれについては菊池秀夫「邪馬台国と狗奴国と鉄」にわかりやすく解説してあるので、私はこの菊池説を紹介する。

「魏志倭人伝」には三十三の日本の地名や国名が書いてある。そのうち四つは現在も地名として残っている。その地名から「倭人伝」に書かれてある距離とを比較すると全体の行程の距離が出る。そこで「帯方郡から女王国まで万二千里」がポイントになる。つまり帯方郡から一万二千里の距離のところに女王国である邪馬台国があることになる。それではその一万二千里の距離とは現在のどれぐらひかということだが、これも難しく考えることはない、途中立ち寄った国と距

離がちゃんと詳しく「倭人伝」に書いてあるのだ。例えば「帯方郡から狗邪韓国まで七千余里」とある。つまり海を渡る前に、すでに行程の半分以上旅しているわけだ。そして海を渡ってから末廬国まで三千里あった。そうすると残りは二千里ということになる。末廬国は現在の東松浦半島付近なのでそこから二千里ほどに邪馬台国があったということだ。その後の行程を調べれば福岡県南部のみやま市あたりになる。そこで問題の一つに方向がある。「東南陸行五百里にして、伊都国に至る」なのだが、これを国の中心を結ぶ方角と考えると末廬国から伊都国へは東北になってしまう。ではどう考えるか。国の中心ではなく末廬国の交通の要所であった港からみるとちゃんと東南の方向に伊都国があることになる。さて、最大の論争点となった「水行」や「陸行」についてどう考えるか。畿内説はここにポイントを置いている。不弥国から邪馬台国まで水行で三十日、陸行で一ヶ月もかかっているのだから近畿までこななければならないということだが、なぜ距離である里を使わなかったのだろうか。それは「倭人伝」は魏にとって公文書であるといことを考えねばならない。魏にとって必要な情報とはなにか。今のところ推測でしかないが、魏にとって必要な情報は不弥国からの正確な距離だけではなく、実際に要した日数も必要としたと思う。皇帝の使者であるからにはそれなりの人数であつただろうから着替えの衣服なども多数持って行つただろうし、お土産の品も持っていただろう。また現地での歓迎の宴なども催されたであろう。そうしたことを考えればおよそ二ヶ月かかってもおかしくないのではないか。水行にしても海だけを考えるのではなく川も考えれば辻褃が合う。とにかく公文書に対して、方角が間違っているなどの解釈はできるだけ避けるべきだ。

次の論争点である三角縁神獸鏡についてはまず森浩一の著作をもとに考察してみよう。

すでに銅鏡について漢族と越との違いについて書いたが、この三角縁神獸鏡の埋葬数が半端ではない。魏志倭人伝では卑弥呼は百枚の銅鏡をもらったはずなのに、すでに日本全体では五百枚も出土している。ということは実際に制作された鏡はもっと多いことになる。このことについて

は何度も魏から貰ったとする学者がいるが、そんなことは魏の文献にはどこにも書いていない。さらに同じ形のものが多い。三つ目にはその文様が神獣なのだが、この文様は制作したはずの魏では少ない。それも外国である倭のために特別に作ったものだという説があるが、贈ったほうの魏でほとんど作れていない様式のことをわざわざ極東の蛮族である倭のために多量に生産するのかということだ。倭という言葉は相手を蔑んだ意味の言葉で、中国王朝からみた蛮族を意味する。だから聖徳太子は隋の皇帝への書簡で、自分たちのことを倭と表現せずに、「日出ずる国」としたのだ。

次に問題となっているのは、魏志倭人伝に書かれている倭人の風俗でこれは魏志倭人伝から直接引用すると、「倭人はみんな顔や体に入れ墨をしているが、これは水の中にいる魔物から身を守るためのものが飾りになったのである。倭人は好んで海に入って魚や蛤を獲って食べている。」ということは、倭人は海の近くに住んでいたということになる。もちろん邪馬台国は倭のなかの一つの国だから邪馬台国では海がなかったということが出来るが、それならば「女王の国は違う」と書きそうなのだが、「倭人はみな」と書いてある。みやま市ではちよいと海から離れているし、畿内の大和盆地では海に出るまでかなりの距離がある。山を越えねば海に行けないのに、好んで海に入って漁をするのだろうか。もともと盆地に住んでいる人が水の魔物から身を守るための入れ墨をするのだろうか。「稲や紵麻を植え、蚕のまゆを集めて織り、細い麻糸や絹織物を作っている。竹の矢には鉄の鏃か骨の鏃。」とあるのだが、大和盆地の当時の遺跡から鉄の鏃は出ていない。絹織物では福岡県が15地点から発掘されているのに対して奈良県は2地点だけ。（安本美典『邪馬台国畿内説』徹底批判）さらに「楼観がある」とかいてあるが、やはり大和盆地には当時楼観がなかった。畿内説の大御所の白石太一はそのうちきつと出ると盛んに発言しているが、考古学者がそのうち出るものを期待して九州説を否定するなんておかしい話だ。

しかし、こうした考古学的な状況にもかかわらず、C¹⁴測定法で箸墓古墳の築造年代が卑弥呼の生きていた年代だとする研究成果がまず朝日新聞紙上で発表され、その後多くのマスコミで話

題となった。箸墓古墳はすでに、多くの考古学的な研究や日本書紀との整合性などから倭迹迹日百襲姫命の墓とされてきた。つまり大和朝廷ができてからの墓ということだ。それが炭素同位体測定方法だけで、年代が決定された。今までの積み重ねられてきた研究成果がひっくり返された。さらにそこにほとんどのマスコミがのっかり、またもや馬鹿騒ぎが始まった。悪い意味での歴史は繰り返されるということだ。おまけに箸墓古墳の年代を絶対視したことから、他の考古学的な成果がどんどんひっくり返されつつある。例えば箸墓古墳から馬具である鐙が出てきたからということ、そのころ（畿内説では邪馬台国のあった三世紀中頃）には日本で乗馬の習慣があったということを言い出した。しかし、鐙は中国の西晋の頃（二百六十五～三百十六年）で発明されたものとされている。それでは日本で世界最古の鐙が発明されたということになってしまう。日本で騎馬という文化が始まったのは五百年前後とされていることからすれば、馬に乗るという文化の前に鐙を発明したということになる。これが科学的な方法といえるのだろうか。この調子でいけば、またもや古代日本は世界に先駆けた文明国であったなんてことになるのだろう。恥ずかしい話だ。なお、これらの炭素同位体測定方法の問題点や、畿内説の珍妙な論理については安本美典「邪馬台国畿内説徹底批判」や「卑弥呼の墓・宮殿を捏造するな！」に詳しく書いてあるのでここでは省略する。

そして日本の国ができた

初期大王家ができたのは大和盆地だ。ではどこから来たのか。ここで菊池秀夫「邪馬台国と狗奴国と鉄」が参考になる。

ポイントとして鉄の発掘状況がある。鉄は先進技術であり武力としても青銅器や石よりも遙かに勝っていた。こうした武器が移入されるということは、戦術においても進んだ技術が取り入れられたとみるべきだろう。また、日常生活においても鉄器は重宝な物であった。つまり当時鉄器を多く持っている共同体は経済力においても軍事力においても他の共同体より優位にあった。そこで弥生時代の武器だけでなく工具なども含めた発掘数を奥野正男の著書から引用すると九州 88%、四国 6%、近畿 3%となっている。さらに県別でみると福岡 36%、熊本 20%、大分 10%、と三つの県に集中していることがわかる。奈良県は 0%。さらに奥野正男「邪馬台国はここだ」では鉄製農具が弥生中期から発掘されるのは九州北部だけで鉄製武器を中期中頃からいち早く所有する首長層が出現するのも九州北部にみられる考古学的事実であるとしている。さらに奥野正男からしばらく引用すると、その発掘状況は墳墓の副葬品だけでなく、住居跡、水田、溝からも発見され、その内容も武器や工具、農具と多種にわたっている。これは鉄器が一般共同体構成員にもいきわたっているということだ。しかし、西日本各地では鉄製武器を蓄えた首長が出現するのは四世紀にはいつてからのことだ。つまり古墳時代に入ってからやっと鉄器が出現する。

九州北部の墓は倭国大乱が終結する二世紀末頃から甕棺から箱式石棺へと転換してゆく。そして卑弥呼の時代には箱式石棺が主流になる。なお、鉄製武器を多く埋葬した箱式石棺は九州北部より対馬のほうが早い。つまり箱式石棺は朝鮮半島から対馬を経て九州北部へ移入されたということだ。こうしたことから奥野正男は大和朝廷の起源を朝鮮半島に求めているが、私にはそうは思えない。さらに菊池秀夫の書を参考にして鉄器について考察しよう。

鉄器の使用や加工は当初は九州北部がほとんどであったが、やがて九州各地へと拡がっていく。さらにそれらの地域で鉄器の形態や組成に大きな違いがでてくる。大型の武器は北部九州に集中していて、鉄刀の87%、鉄剣の77%、鉄矛と鉄戈は中部より南では出土していない。鉄器の普及量が増加する一方で、中九州、東九州では舶載鉄器の流入量が途絶えるようになり、鉄の不足分を石器で補うようになる。その後、村上恭通の研究では中九州（熊本）での鉄器が急速に増加する。奥野正男の研究では熊本と大分で鉄鍬の増加が目立ち、福岡と熊本の県境の山間部に多い。こうしたことから北部九州のグループである邪馬台国と東・中部九州グループである狗奴国との軍事的緊張感が続いていたと指摘している。また、魏志倭人伝で魏の明帝が卑弥呼に贈ったとされる五尺刀二口が当時の状況からして鉄の刀である可能性が高いのだが、五尺もある鉄刀（素環頭大刀）が畿内から出土されるのは四世紀に入ってからで、九州ではこの当時北部九州に集中して出土している。さらに製鉄技術からみると、古墳時代前期に福岡県博多遺跡から見つかった鍛冶関連遺物から、この遺跡では当時の日本で最高水準の技術で鉄が生産されていたということがわかった。畿内論者が卑弥呼の墓とする箸墓古墳がある纏向遺跡にある勝山古墳で見られる技術よりも高水準だった。こうしたことから菊池は、この高い鉄生産技術をもったグループが大和の地で王権を形成したとみている。そして、阿蘇谷では現在も褐鉄鉱のもとになるリモナイトという土が多く採れるという。この褐鉄鉱は比較的低い温度でも製鉄できることから、古代の製鉄の原料として有力視されている。

さて、大和朝廷成立への道へ大胆に進んでいこう。奥野正男や菊池秀夫の研究では、九州で鉄器が多量に発掘される主な遺跡のうち、大分の高添遺跡や阿蘇山麓の遺跡ではどういうわけか古

墳時代になって突如消滅してしまふのだ。戦争で絶滅させられたというより、まるで集落を放棄したかのように家屋が廃棄されているのだ。ここから菊池秀夫は狗奴国の阿蘇山麓や大分を拠点としていた集団が大和へ移ったとしている。その根拠として一ツ瀬川流域にある新田原古墳群には日本最古の前方後円墳がある。そうしたことから大和王権の起源の可能性があるとしているが、宮崎の西都原古墳の前方後円墳は三世紀中頃と考えられている。形は纏向遺跡の古墳と同じタイプだ。こちらのほうが記紀神話と整合性がある。菊池秀夫の解釈では九州には大きな勢力が五つあった。その一つは邪馬台国を中心とした北部九州連合国家。南に狗奴国。主な勢力は熊本の菊池川流域勢力。熊本中部の白川流域勢力。大分西南部の大野川流域勢力。そして宮崎中部の勢力。そのうち大野川勢力と白川勢力は密接な関係にあった。そこに菊池勢力も関連していた。中心は白川勢力。その中の宮崎勢力が畿内へ移動したということだ。つまり、狗奴国という連合国家のなかの宮崎グループが畿内へと移動し大王家になって大和王権をつくり、それが大和朝廷として日本の中心国家となったということだ。これは考古学的と記紀などの文献史学との両方を満足させる。記紀の解釈をめぐるのは戦後、マルクス主義の影響もあって、支配階級が自分たちにつごうのいいように作った物語で、その内容は荒唐無稽というような考え方が広く一般的であった。しかし、旧皇族の竹田恒泰が「旧皇族が語る天皇の日本史」にも書いているように、「天皇の系・事績そして神話などを記した『帝紀』『旧辞』」などをもとに、「日本語の要素を生かして音訓混合の独特な文章で天皇家の歴史を綴ったのが『古事記』である。編纂当時、まだ仮名は成立していなかったため、漢字だけでは日本語の音を伝えることはできなかった。そこで編纂者は神名・地名などの固有名詞に漢字の音をあて、日本語の音を伝えようとした。」もので、あくまで天皇家のための書だった。それに対して、日本書紀は「外交に通用する正史を持つ必要があった。当時の東アジアにおける共通言語は漢語（中国語）であり、正史たる『日本書紀』は漢語によって綴られた。また、『日本書紀』は中国の正史の編纂方法を採用し、公式の記録としての性格が強いことから、広く海外に向けて書かれたものだと考えられる」ということで、

外国に向けた公式の日本の正史だったわけだ。つまり、記紀はその性格が全く異なる。内に向けたものと、外に向けたものと。その違いを頭に置いておかないと、特に古事記を荒唐無稽な書と解釈してしまうのだ。もちろん、記紀が書かれた頃の朝廷内の権力構造に規制されていることは当然なことであるが、そこには当時の天皇家や権力者（中央貴族たち）の自分たちの正当性の主張が語られている。大和盆地で生まれ大きくなった政権であれば、どうしてその出自を宮崎にする必要があったというのか。

では何故どのようにして宮崎のグループが畿内へ移動し、日本の中心グループとなったのか。それは海外との関係でみなければならない。当時大陸では魏が西晋に代わり呉と蜀を滅ぼし三国時代に終わりを告げたが、皇族同士の内乱がおき国力は弱体化し、やがて五胡十六国時代へと突入する。また朝鮮半島においても漢が設置した楽浪郡がその後、魏から晋へと引き継がれ四世紀に入って高句麗によって滅ぼされる。そうした東アジアの混乱した情勢のなかで倭国では新たな結束をする必要に迫られた。朝鮮半島や中国大陸からの侵略を防ぐためにも、より大きく強くなる必要が生まれた。そこで新しい土地で、新しい大王を擁立することにした。三世紀頃の大和盆地にはあまり人が住んでいなかった。大きな共同体がなかった。そこで朝鮮半島や中国大陸から距離のある、防衛上都合のいい大和盆地が新しい王都に選ばれた。当時の有力勢力・共同体の首長らが協議して決めたと思われる。その有力勢力は北部九州勢力、東・中九州勢力、出雲勢力、吉備勢力であった。いわば九州・西日本連合国家とでもいうべき国ができたのだ。出雲の国譲り神話から、大和盆地は出雲勢力の土地であったという人もいるが、それを確証する証拠は見つかっていない。ひょっとしたら、有力勢力に属さない奈良盆地東南部に環濠集落を築いていた勢力も参加したかもしれない。ただ、唐子・鍵遺跡は三世紀に入る頃に急速に衰退している。大和盆地で大きな遺跡が出現するのは、三輪山麓の纏向遺跡からだ。三輪山麓では、もともと現在の三輪で小さな共同体があるだけで、纏向ではほとんど人が住んでいなかった。そんな辺鄙な場所に突然大きな墳丘墓が築かれた。この纏向遺跡から西日本や九州だけでなく、東海や北陸の土器が

発掘されている。このうち北陸は出雲勢力と密接な関係があったようなので出雲勢力の支配地になっていたとみてもよいかもしい。

纏向遺跡の南端にある箸墓古墳からは多量の副葬品が出てきた。松木武彦は「列島創世記」で、箸墓の棺の外側に膨大な品々を配置していることから、宗像大社の祭祀と比べて、箸墓に埋葬された人物は、遠距離交易を支える航海の守り神と同等の神格を持つと考える。つまり、日本列島各地の首長たちが「お互いの利害を調整して対立を避け、物資取得のためのさまざまな活動を共同でおこなうための、対外的な旗印となる人物を共同で擁立するに至った。」「こうして擁立された人物は、日本列島の広い範囲の利害を代表し、そこに寄り集まった人々のアイデンティティを体現し、対外交渉の先頭に立つ、経済・文化・政治の各方面にわたる代表者だ。」ということだ。この考え方は非常に魅力的だ。私のような戦後に生まれ育った人間は、天皇家にたいしてはかつての日本の支配者というイメージしか持っていなかった。多くの同じ世代の人達もそうだろう。しかし、天皇家とは本来、国家や民草のために祈ることが主な仕事だった。そのために各地の有力首長たちから推挙されて宮崎勢力の首長が大王として大和の地に迎え入れられた。だからこの頃の日本列島には大きな戦争の跡がない。西洋のように力づくで権力を奪ったわけではないのだ。これが、千七百年近く天皇家が続いている、存在している根拠なのだ。神武東征神話は中国王朝のまねをして虚勢を張って創作した物語だろう。この天皇家の役割についてはあとの「まとめ」でもう少し詳しく書く。

日本の国ができる過程を簡単に書いたが、「国譲り神話」をどうとらえるかということ少し考えよう。「国譲り神話」をそのまま事実と考えると、大王家が出雲族から大和の地を略奪したということになる。はたしてそうなのだろうか。「古事記」によると第十代天皇崇神は磯城の水垣宮に都を作って天下を治めた。しかし疫病が流行り神託を受けようと床に入ると大物主神が夢に現れて意富多々泥古に自分を祀らせよ」と言った。そこで現在の八尾にその人を見つけて彼を

祭主として三輪山を祀ったとある。これが日本書紀だと太田田根子は現在の堺の陶村の人になっている。陶村の人であればオオタタネコは渡来人ということになる。そしてこれからは面白いところで、オオタタネコは三輪という性を賜って以来、代々三輪山（大物主神）の祭主になるのだが、その妻には代々出雲から娶っていたのだ。祭主の妻ということは巫女を意味する。神が乗り移る依り代であっただろう。では何故わざわざ出雲から妻を娶ったのか。疫病が三輪山麓の地祇の祟りとして、それを鎮めるためにより強力な力を持った神を招いたのだ。それが大物主神なのだ。大物主神は三輪山をご神体とする神であるから、雷神としての性格もあっただろう。しかし、蛇の姿をして人間の（首長）娘と契る話など、蛇神として有名だ。雷神としての性格から、縄文以来の土着の神という意味にも取れるが、雷神も蛇も農耕神という性格を持っている。そして、もともとが大国主命に繋がる出雲の農耕の神であった。その神が三輪山麓地方を治めるために出雲から招請されたということだ。とすれば、出雲の神は天皇家にとって重要な神であるわけだ。もし、出雲族が大王家に滅ぼされた部族（氏族）ならば、大王家はなぜそんな滅ぼした相手の神を呼ぶ必要があったのか。そして、その後、大物主神は祟り神として何度も天皇家を苦しめる。ここに秘密がある。私の推測では、初期大王家を擁立した有力勢力の出雲は、その後権力争いにやぶれ中央貴族（群臣）から排除されていく。それが国譲り神話になり、祟り神になった理由だ。ちなみに、私は崇神天皇は四世紀初め頃の大王だと思っている。畿内説のような三世紀中頃とは思えない。纏向遺跡には崇神、垂仁、景行の三天皇の宮に関係しているらしいのだが、三輪山麓に突然現れたことなどから、初期の大王家の宮があったと思われる。ひょっとしたら、崇神が最初の大王なのかもしれない。

アイヌと琉球

アイヌの人達については主に崎谷満「新日本人の起源」を引用・参考にする。崎谷はDNA分析だけでなく、言語学の分野からも考察を行っている。

北海道の新石器時代からアイヌ民族の成立までをみると、本州とはかなり異なっている。北海道には極東・アムール川流域やカムチャッカ半島から絶えずヒト集団が入ってきていた。単一のヒト集団が単発にではなく、様々なヒト集団が絶えず入ってきていた。新石器時代は一万二千年前から二千四千年前まで、そのあと紀元五世紀頃まで続新石器時代が続き、五世紀から十三世紀までオホーツク文化と擦文文化が並立し、十三世紀にアイヌ文化が成立した。植物相からみると北海道のほとんどは針広混交林で南部が落葉広葉樹林だ。プロト・アイヌやプレ・アイヌのヒトたちは北海道内の各地に独自の生活様式を持ち独自の文化を創った。大きく分けて道北・道央・道東・道南の四つのグループになる。だから同じアイヌといっても言語が違い文化もDNAも異なる。そうしたヒト集団のうち道南にいたグループはやがて勢力を拡大し、北や南へ進出していく。そして本州の東北や上越地方まで勢力を拡大した（高橋正勝）。金田一京助は日本列島各

地にアイヌ語が残っているとして、その考え方が、アイヌ人先住民族説を産んだように私は思っているが、実際東北各地にはアイヌ語の地名が残っている。ひょっとしたら、三内丸山遺跡はこの江別グループによるものかもしれない。この勢力がのちにアイヌ民族の母胎になった（崎谷）。この道南グループの文化を江別文化と呼ぶが（高橋）やがて消滅し擦文文化に取って代わられる。擦文文化は本州の平安文化を東北北部を通して受け入れた可能性があり、それまでの北海道独自の文化とは異なり金属器も使用されるようになる（笹田朋孝）。こうした擦文文化とオホーツク沿岸でおこった文化とが融合したものがトビニタイ文化として道東で確認され、十三世紀にアイヌ文化が確立される（崎谷）。

さて、もう一つの先住民族とされてきた琉球人についても崎谷満「新日本人の起源」から引用・参考にして、簡単に説明しよう。

琉球は北部と南部とでは気候や植物相も異なり、言語も違う。南琉球は台湾に非常に近く、DNAからも言語学的にも台湾の影響が大きいと思われる。一方北部琉球は十一世紀頃から、九州から多くのヒト集団が移入し、文化や言語に大きな影響を与えた。その後十五世紀に三山統一王朝ができ、独自の文化を形成するが基本的な言語は九州北部の言語（崎谷）ということだ。つまり琉球の人達を独自の民族と呼ぶことは考え直したほうがいいのかもかもしれない。ただアイヌの人たちと同じく天皇制の外の文化を持った人達ということはできるが、北部琉球の人たちは基本的には大和人と同じだと思う。新石器時代から形成してきた「心」は同じだと思う。これはこれから高まりそうな沖縄独立論を考えるうえでも考慮すべきことだろう。またここではふれることができなかったが、済州島もこれからもっと研究の対象とすべきではないかと思う。済州島は十五世紀中頃に李氏朝鮮によって王族の身分を廃止されるまで独自の王族がいた。高麗などによって一時期属国にされたことがあっても、済州島独自の王族がいた。だから言葉も半島の言葉とは違う系統の言葉（崎谷）を現在も使っている。風邪が強く山が多く農耕に向いていない土地ということもあって、漁業がとてもしかんだ。特に海に潜る海女は半島にはほとんどいないが、済州島

では非常に多い。戦前は日本へも長崎や伊勢に海女として出稼ぎにきている。紀元前から日本と交流があり大和朝廷ができてからも「済州島（耽羅国）と日本とは公的にも私的にも極めて密接な関係に結ばれていた」（高野史男『韓国済州島』）といわれ、特に沖縄や長崎県松浦郡とは頻りに交流があって、相互の人が（例えば済州島の人が沖縄へ、逆に沖縄の人が済州島へ）住み着くこともあった。また、堂たんのような古い民間信仰の聖地がまだ残っていて、沖縄の御獄や日本の古い信仰との関連が考えられている。この堂たんは、半島では李氏朝鮮が儒教を擁護し広めたことからあまり残っていない。仏教の寺院や仏像と同じように古い伝統的な宗教施設は破壊されたのだ。日本人の原像を探るうえでも、済州島の研究を深化させる必要があると思う。岡谷公二は「原始の神社をもとめて」で神社と御獄・堂たんの関連を調べ、それらに共通するものがあるとしている。安本美典「研究史 日本語の起源」では朝鮮半島南部と九州北部・山陰と済州島の一部を「古日本語（日本基語）」として、そこに水田稲作とともにやってきた、長江流域ビルマ系言語などの影響を受け倭人語（日本語祖語）が成立したとする。さらに朝鮮半島南部にいた古日本語集団は半島から追い出され倭人語が日本列島を統一していったということだが、崎谷と大きく違うのは九州南部から四国・近畿・東海の太平洋岸にはインドネシア系言語であったとしているところが大きく違う。私は朝鮮半島および済州島と北部九州・山陰・吉備は同じ言語を使っていたのではないかと推測している。ただ、この推測は文化的な類似性からみた推測であって、言語学的なものではない。

まとめ

さて、今までのことをまとめると、新石器時代から現代まで、日本列島には様々なDNAを持ったヒト集団が、列島各地で様々な文化を花開かせて生活していたということだ。列島全体と

して、縄文人や弥生人といった統一した文化をもったヒト集団がいたわけではない。現在も列島各地で大きく異なる方言があるのもその証拠だといえよう。三十年ほど前、私の親族が私と夜の大阪のスナックで食事をしていて、食事について話をしていたら、スナックのマスターが急に顔を強ばらせて、「なんて言ってるんや」というので、私はひよっとしてと思って「この人は東北の人だからこういう味付けは初めてだったけれど凄く美味しいってさ」といったら、驚いたような顔をしたあとすぐに緊張感を解いて「えっ、東北か。うまいのか。」と言った。たぶん彼は私の親族を朝鮮人と勘違いしたのだろう。それほど、日本各地の方言は異なっている。相互に理解ができないほどだ。現在はTVが普及したからそういうことも感じなくなったが、こうした言語の違いは文化の違いを意味する。もともと大阪と東北は異なった文化を持って、現代まできたのだ。そうした異なった文化をもった人達と一緒にこの日本列島で生活してきた。戦国時代のように一時期各地で大きな戦いがあつたが、ほとんどの期間を比較的平和に暮らしてきた。相手の共同体を徹底的に破壊するような争いはしてこなかった。激しい戦いをするときには農閑期を選んで行われた。

ここでもう一度大和朝廷ができたときのことを考えてみよう。九州・西日本各地の有力共同体（国）は激動するアジア情勢をにらんで、半島や大陸に対抗する国作りをする必要に迫られた。そこで邪馬台国が卑弥呼を推戴してうまく纏まったように、誰かを大王として推戴することにした。そこで選ばれたのが宮崎の首長だった一族だった。地理的に半島や大陸からの侵略に対応できる列島内部の大和が選ばれた。大和はいまだ古い文化を持続している東日本への進出にもつごうのいい場所であった。だが疫病が流行ったために土地の神を鎮めるために出雲から神を招請し三輪山に祀った。新しい国に似合うモニュメントとして前方後円墳を作った（松木武彦）。古墳とはたんなる墓ではない。現代的なものでいえば、国会議事堂や東京都庁などの公共施設のような意味があつた。共同体の象徴として、他の共同体や外国に見せるためのものであつた。だか

らそれは共同体構成員にとっても誇らしいものであったはずだ。東京スカイツリーのようなものだ。実用性より、世界一ということが市民の関心を引き観光名所になっている。古墳もそういうものであった。古墳への埋葬という儀式そのものが神とともに共同体内外の人たちに対して見せるためのものであったろう。大和朝廷の大王の墓である古墳には、その地域共同体員だけでなく、大王を頭に戴く多くの人にとってのプライドが詰まっていたと思う。

もともと大王家である天皇家はそうした連合国家全体のために祈ることが主な仕事であったようだ。魏志倭人伝では卑弥呼が鬼道に仕え人を惑わすとあり、また、骨を焼いて占いをしていたということから、当時道教の影響があっただろうといわれている。また。石川九楊は「漢字がつくった東アジア」において「原日本、原朝鮮的なものの実体は実際には証明できません。事実としましては、脱宗教化した秦・漢という政治国家の漢語拡大運動によって東アジアが文明化（文字によって明るみに出されること）され、形成され、そのあとにいくつかの国と文化へ分かれていったと考えた方が正しいと思うのです。」といった独特の世界観を語り、「紀元前後には日本人は漢字の読み書きができた」としている。漢字の読み書きは首長クラスはそうであっただろうが、この考え方ではあまりにも中国（漢民族）の影響を大きく考えすぎだろうと思う。そうすると道教の影響を大きく考えざるをえなくなる。しかし道教はあくまで八百万の神の一つとして（新しい神として）日本人に取り入れられたと思う。それは仏教でも同じだ。仏教の神々も八百万の神の一人として（新しい神として）取り入れられたのだ。そのポイントは神道にあると思う。ここで神道というのは天皇家を中心とした神道だけではなく、民間信仰としての神道を含めたものを言う。それではその根本的な理念とは何かといえば、森の思想なのだ。森そのものが神であり、神のおわすところなのだ。神社には必ず森がある。これは新石器時代から日本列島に住む人達が積み上げてきた思想なのだ。自然を敬い自然とともに生きる思想が神道といえる。これを簡単にアニミズムと表現すると、西洋からの視点に立った蔑視を感じるので私はこの言葉を使わない。もともとは自然にたいする畏怖や食料確保の欲求からの自然崇拝や精霊崇拝だっただろう。現在も神社に行けば大きな石や大きな木にしめ縄がかけられている。しかし、そうした自

然への畏怖や崇敬の念を失い、自然と共に生きていくという理念を失った結果が今回の地震による災害に繋がったのだ。自然の力は人間が机上で計算できるものではない。人間ができることはせいぜい過去の記録から、これからおこる災害を予測しできるだけ被害を少なくするための対策をたてることなのに、政治家も学者も「想定外」という言葉を乱発している。自然のおこすことはもともと人間には想定しようがないにも関わらず、数字のマジックに慣れきってしまい、安易な方法しか考えようとしなかった。それが被害を大きくした。原発の問題にしても、当初は地震という自然の災害だったが、それに対する対策をなにも考えてこなかった、企業や政治家による人災で大きな被害が起きたのだ。

そして、自然への畏敬の念を基盤にした日本人の心の象徴が天皇制なのだ。先に、「天応の仕事は国や民のために祈ることだ」と書いた。崇神天皇の頃疫病が流行った。その時崇神天皇は「私の世になって災害が多く起こるのは朝廷に善がないためで、天神地祇の咎を受けるのではないかと恐れる」（日本書紀）といい、三輪山に大物主神を祀った。聖武天皇の時代では「聖武天皇の治世は、実際は『天平ロマン』の華やかさとイメージとは懸け離れた政権の混乱で、権力闘争と反乱がくりかえされ、疫病・凶作が重なった。凶事が起きるたびに聖武天皇は一身に責任を感じ、仏教の力を借りて難局をのりきろうとしたと伝えられる。」（竹田恒泰）。また竹田恒泰は「時代ごとに天皇のあり方は変化してきたが、唯一変わらないものは『祈る存在』であることではなかろうか。」として、現在の天皇の姿が明治の頃よりも本来の天皇の姿に近いとしている。実際、現在でも天皇は多忙な国事行為とともに、一年に三十日ほど祭祀に関わっている。むしろ、明治時代の天皇は西洋の王をまねたもので本来の日本の大王の姿ではない。そのところは、日本の民族派を自認する人のなかにも明確に自覚していない人が多い。もっと日本の歴史を大切にしたいということは現在の政治状況にもいえる。私はもう政治に口出しするのはやめたのだが、現在の状況は私たち老人にも関わってきそうなのであえてここで書いておく。

橋下という男の事が連日マスコミを賑わしている。この男の生い立ちについて私はとやかく言

う気はない。まえがきに書いたように私の生まれ育ちも他人に自慢できるものではない。私が問題にするのは彼の政治の手法・内容なのだ。かれは公立校での国旗掲揚や君が代斉唱を義務づけ、違反した者には罰則を科している。国を大事にする心ということからみればもっともなことをやっていると評価する人もいるが、彼が日本の国を愛し、日本の歴史に誇りを持っているからそうしているのではない。単なる人気取りのためのパフォーマンスでしかない。社会に不満を持っている多くの人たちの不満を発散させるためにはどういうパフォーマンスが必要ということを知っているからだ。このことを、ローマ皇帝のおこなった大衆操作方法としての「パンとサーカス」というものに例える人たちがいるが、彼の手法はもっと下品なものに思える。民間企業で長年苦情処理をしてきた私には、この男の手法など大したものと思えない。むしろこの男を支える多くの企業・知識人・官僚・政治家がいることに問題の深さを感じる。この男の手法は彼がバラエティー番組に出演しているときに獲得した方法だろう。かれの話術は基本的に弁護士キャラの芸人だろう。島田紳助や、やしきたかじんの番組で空気を読む能力を獲得した。人気も出た。だからかれは絶えずマスコミの前に顔を出し発言する。かれの政治の知識は素人そのものでしかない。逆にそれが「うける」発言となる。親しみやすさとしてうける。独裁者を気取るのも少年漫画的発想なのだ。それを視聴率や販売部数ばかり気にしているマスコミが大喜びでよいしょする。そう、ここでも翼賛報道がなされているのだ。自分に都合の悪いことは他人の様に語り、自分を批判する人たちには、大声で罵倒し、恫喝し、大勢の取り巻きたちがそれに同調して騒ぎ立てる。私の思うには、この男はTVカメラのない部屋で、自分が批判している相手と二人きりで討論する度胸も知識もないように思える。

橋下は日本人が積み上げてきた歴史的な文化を理解できないから自分が興味がないという理屈や経済効果という理由で文楽や交響楽団への補助金を極端な低額に減額したり、児童文学館をつぶしたりする。これが日の丸や君が代を大切にせよという政治家のやることなのか。彼の基本的な考え方は弱肉強食だから、とにかく勝つためにはなんでもする。学生時代に破れた革ジャンをタダ同然で仕入れて、高額で売り、「騙された人がお人好しなんや」とうそぶいていた頃とまったく

変わっていない。むしろそうした認識が彼の政治家としての基本になっているのだろう。

維新の会の中心人物の多くが小泉内閣以降マスコミからバッシングされた市場原理主義者や欧米資本の金融会社で働いていた人達だ。いずれも大都会にしか興味がない。大阪に欧米と同じ街をつくることしかアイデアがない。そこに博覧会のプロデュースで名をあげた堺屋太一がからんでいるといった構造だ。だれ一人として日本の歴史や文化を理解している者はいない。おまけに弱肉強食が人間社会の原理だと信じ込んでいるようだ。橋下が総理大臣になったら、小沢一郎のように天皇の国事行為まで自分の都合のいいように変える可能性がある。それが民意だとうそぶくだろう。こんな人物たちをマスコミがこぞって持ち上げる。御輿に担ぎ上げている。こうしたマスコミの異様な行動は今にはじまったことではないが、インターネットが普及して経営の危機を感じているためか、TVなどはほとんど見るに堪えない状態だ。政治までバラエティにしまった。どんな番組にもお笑いタレントが出ていて、政治家や企業をおちよくる発言を繰り返す。それがうけるからもうやめられない。その結果政治家自身もお笑い芸人になってしまった。問題はそのお笑いの内容だ。権力を持った者をおちよくるうちはよかったが、現在では一般市民がコンプレックスを抱いている官僚や知識人が標的になっている。橋下は言う、「こいつら自称知識人は」と。こういう言い方は自分のほうが本当の知識人であるかのようなイメージを大衆に植え付ける。だから大衆は「橋下さんなら何か（！）やってくれる」と思い込んでいる。しかし、橋下は50人以上の顧問を雇っている。梶添都知事の3人とくらべれば異常な数ではないか。彼の政治家としての意欲の表れであろうが、もともと政治家としての知識がまるでないということの表明とも言えるし、様々な肩書きを持った人物を自分の周りに集めることによって、自分にもそうした能力や知識が身につくかのように思い込んで喜んでいるだけのようには思える。

彼らが積極的に攻撃するのは社会的地位や名誉がある、失う物が大きい人たちだ。まさにクレイマーと同じ手法なのだ。論理の正しさを競うのではなく、どちらの声が大きいかということとを競っている。自分たちを批判することはリスクが大きいから自分たちに文句を言うなど脅して

いる。自分たちに都合の悪い言葉・人には数の力でねじ伏せようとしている。しかし何も持たない人間にはまともに政策の説明や論争をしない。何も持たない人間には彼らの脅しがきかないからだ。彼らが用いている新しい方法は、ネット上の情報量で敵に上回るということだ。自分に都合の悪い意見をいう人のブログやホームページが検索されないように、自分たちに都合の良いように編集されたブログなどが検索の上位にくるように、数の力を頼み操作している。

それではこういう芸人政治家をどうして大衆は支持するのか。それは一つにはTVの見過ぎなのだ。私の親族の老人たち（故人）は、年をとると一日中TVの前で寝そべっていた。居眠りしながらTVを見ていた。これではTVから一方的に情報を送り込まれ思考力がなくなってしまう。私はもうほとんどTVを見なくなった。子どもの頃から、まったく勉強もしないで一日中TVばかり見てきた私がTVを見る時間をできるだけ少なくし、見るのはほとんど衛星放送だけにした。ニュースもBS1のワールドWaveニュースとBSニュースを中心にしている。新聞もインターネットで主な新聞のニュースを全部チェックしてきたことをやめて、興味のあるニュースだけをさっと拾い読みするだけにした。時間に余裕ができて読書量が増えたので、街の図書館では物足りなくなってより大きな図書館まで行くようになった。そうすると、なんとなく気分が落ち着いてきた。それまで毎日イライラしていたのに、気分が前向きになってきた。そこで、他の老人たちに言いたい。TVのスイッチを切り、街に出よう。自分の目でいろんなことを確かめよう。

ここでもう一つマスコミへの批判をしたい。それは二酸化炭素と温暖化の問題だ。気候というのは様々な要素がからみあっておこる。それが単純に二酸化炭素の増加だけが原因で温暖化するとは私には思えない。しかし、世界中で二酸化炭素だけが悪者になっている。本当にそうなんだろうか。分析方法に問題があるように思える。単純に気温の上昇曲線と二酸化炭素増加曲線を重ねただけのように思える。まるで東北の人に高血圧が多いということと、塩分の取り過ぎということを重ねたように。そこでは東北のような寒い地方と温暖な地方とでは血圧が一緒でいいのか

とか、塩分摂取量が同じでいいのかといった議論はきかれない。すべてを平均化された数値で判断している。生物としての人間とはそんな単純なものなんだろうか。様々な地域の気候や風土に応じて身体は適応しているのではないのだろうか。それを全ての地域の平均化した数値で判断してよいはずがないのだ。生物の多様性と同じように人間も多様な身体を持っているはずなのに、人間までも数学的に処理している。医学までもが効率といった経済を重視しているようだ。

話がずれてしまったが、地球温暖化の問題に関して生物学者の福岡伸一「動的平衡2」から簡単にまとめて引用すると、大気中の二酸化炭素濃度は0・0三五パーセント。そのうち人間の活動によって発生する量は一パーセント。つまり大気中の0・0000三五パーセントしかない。京都議定書では排出量の二十五パーセント削減せよということだから、さらにこの四分の一減らすということだ。計算するのめんどろ。こんなわずかな量を削減するだけで問題が解決するのだろうか。空気中に含む量が非常に少ない二酸化炭素がそんなに温暖化に関係するのだろうか。どうしてそうだといえるのか根拠を聞きたいが今のところ私の満足する答えはない。過去の気候の変動要因は何だというのか。直接的には太陽の活動が大きく地球の気候に影響を及ぼしているはずだ。太陽の活動を無視して、二酸化炭素の増加量だけで50年後の地球の温度を推測するのは、あまりにも非科学的ではないのだろうか。

ただこうした論議が資源の再利用や有効利用という方向へ進むのは賛成する。森を破壊して成長してきた西欧文明をもう一度考え直すという意味でも日本が世界の先頭に立ってもらいたい。

最後に一言付け加えたい。私は手塚治虫の「鉄腕アトム」を見て育った。人間の未来は科学で明るく楽しいものになると信じていた。しかし、高校時代に読んだ今西錦司の進化論が私の心のなかに大きな変化をもたらした。特に棲み分けという概念に感動した。ダーウィンは個体が生存競争をとおして適者生存によって進化がもたらされたと説く。わずかの能力の差が積み重なって大きな変化になったと。しかし、わずかばかり足の速い動物では肉食動物の牙から逃れることは

できないはずだ。ダーウィンの進化論ではわずかばかりの能力の差では生き残れないという疑問に答えられない。そしてこうした考え方の基本にあるのは個体間の優劣が種全体の優劣へと導くということだ。それに対して今西錦司は種全体が一つの方向へ進化すると考えた。その基本にあるのは個体の能力の優劣ではなく、種全体の能力なのだ。もちろんこの今西説にもいろいろと問題がある。しかし、個体よりも種に重点をおいたところに私は日本的な考え方を感じた。遺伝子の変異は個体に起こるが、その遺伝子の変異が同じ環境に住む種全体に起こる可能性を考える必要があると思った。全ての事を点や個体をもとに考える西洋人に、種全体の変化というこの考え方は理解できないだろうと思った。このことが後に、私が全共闘運動に関わりながら、マルクス主義者にならなかった理由だと思っている。マルクスの思想は彼自身が語っているようにダーウィン進化論に非常に影響されていた。遅れた段階にあるアジア・アフリカとその上に君臨する進んだ西欧諸国。その進化の頂点にイギリスがあり、弁証法的にイギリスから共産主義社会へ向かっていくという認識。西欧の植民地や奴隷制度を肯定する理論と同じ世界認識のように私には思える。私にはどうしてもダーウィンの進化論にもマルクスの思想にも生理的になじめなかった。

人生の終末が近づいてきたこの頃、もう一度自分の人生に向き合って、これからも日本人の心の原風景について考えていきたい。